

「内なる自然」とヒト

～9度目の「3.11」にあたって～

シンキング・バーズ
日本語研究班「外なる自然」への
ヒトの営みについて

あ の日から9度目の3月11日を迎えます。時間の経過と共に、あの日のことが人々の記憶から薄らぎ、さらに、毎年のように繰り返される自然災害が上書きされて、ボクたちが体験したそれぞれの「あの日」は、歴史の片隅に押しやられて行くようです。それは、やむを得ないことなのでしょう。

ボクたちはあの日、「自然 (nature)」が持つ力に、脅威と困惑を感じました。「想定外」ということばが繰り返されたように、人災と言える原発事故が加わって、日本中が不安な日々を過ごしました。日本ではその後、数々の自然災害が連年にわたって発生し、「自然」の恐ろしい面を体感し続けました。また、昨今の世界を騒がせている新型コロナ・ウィルスへの不安も、「自然」がもたらした災厄と言えます。

「自然」は、人類が生存できる環境そのものです。しかし、猛威を振ると、ボクたちの生存を脅かします。人類は、「自然」の脅威を克服してはいないし、たぶんこの先、その脅威を和らげることはできても、克服することはできないと思います。

9度目を迎える3月11日に際し、「自然」ということばとヒトの営みについて、考えてみます。

●内と外との「自然」

ヒ

トは、地球上の生物としてヒト自



身が「自然」の一部に属

しています。その生命活動自体が、「自然」の一部なのです。ヒト科に備わった成長過程や生理的な体内反応など、ボクたちのからだは、生命としての「自然」を生きています。英語の“natural (生来の)” “native (本来の)” を、ヒトに対して用いた時のボクたち自身が持つ「自然」です。

一方、ボクたちは、人類を棚上げにした生活環境や外部環境という意味でも、「自然」ということばを用います。その「自然」には、水や空気、光や闇、岩石や宇宙空間のような、基本的に生命的ではない「自然」と、動植物たちが織りなす生命的な「自然」の二種が含まれています。

ボクたちは、ヒトに備わった生体反応のような「自然」を「内なる自然」、外部環境としての「自然」を「外なる自然」と呼ぶことにします。「内なる自然」と「外なる自然」は、矛盾を孕みます。しかし、連動する概念で、別物という訳ではありません。

人類は、歴史的にみると、「外なる自然」に対して霊的なものを感じ、数々の宗教を生み出しました。人知を超えたさまざまな現象は、神が引き起こすとして、その神に祈りを捧げることで、災厄に見舞われないことを願いました。太古の人類は、そうする以外に「外なる自然」の猛威に太刀打ち

できる術がなかったと言えます。

ところが、「近代 (modern times)」に入る頃から人類は、「外なる自然」の猛威に対抗する科学を発展させ、宗教的な迷信や諦念を乗り越える努力を始めました。その基底としたのが、「理性 (reason)」と呼ばれる概念です。「理性」を駆使して説明がつく現象に対しては、「理性」を駆使して対策を考えて実行する。その延長線上にいるのが、現代を生きるボクたちです。

もちろん、科学的に説明がつかない現象や説明がついても対策ができない現象は、この地球上には、数多くあります。ある意味では、神に祈るしか術がないことは多く、その観点から「近代」批判をする方々もおられます。盲点だらけの「近代」は、やり玉に挙げる格好の標的なのかもしれません。

●あの日の「内なる自然」

ボ

クたちはあの日、何が起きているのか判断できないような、一種の思考停止状態を体験しました。あの日のボクは、目の届く範囲とラジオからの情報だけが、現状を知る手掛かりでした。停電と通信網の寸断で映像情報機器は使えず、1キロ先で何が起きているかさえ、見当がつかない状態でした。

しかし、1キロ先で何が起きているかなど、平穏な日常下でも分かる訳がないし、気に留めてもいません。その時のボクの脳裏には、阪神・淡路大震災で起こった火災の映像がよぎり、近隣火災の発生を危惧したのだと思います。だから、近隣の状態を知りたいと思ったのでしょう。それが、ボクに備わっていた「内なる自然」でした。

ボクたちはあの日、一人ひとりが、それぞれの「内なる自然」に向き合う体験をしたと思います。その体験は恐らく、場所によって、年齢によって、置かれていた状況

によって、一人ひとりで異なるはずですが、「内なる自然」を体験したという意味では横軸で繋がり、それぞれがそれぞれに「自然」について考えたと思います。

余震の発生頻度が下がり、住居内の片づけが一段落した頃、ボクは、客観情報を知りたいと思い、気象庁のホームページで地震発生データを閲覧しました。3月11日から12日にかけてのデータは、愕然とするものでした。そこには、ほとんど分刻みで発生していた膨大な地震データが、公開されていました。最大震度4以上に絞り込んでも、約70回の発生回数でした。あらためてすさまじい地震だったと悟り、それを観測していた「近代」の技術力に驚きました。

●「理性」を無力にしないために

ヒ

トは、日々の暮らしを「内なる自然」と共に過ごしています。その「内なる自然」は、「本能 (instinct)」とか「本性 (real nature)」と呼ばれることがあります。動物としてのヒトに身についたもので、紛れもなく動物的です。そのヒトの生理的機能が、日々のボクたちを生かしています。しかし、時として、暴発的な言動を起こしたりします。

ボクたちが日々の生活を送る上で頼っている「理性」は、盲点だらけで、不完全なものです。自然災害や疾病は、その「理性」の盲点を突くように、ボクたちの日常を襲うことがあります。その時、ボクたちの「内なる自然」は、本能的な言動へとボクたちを駆り立てるかもしれません。ボクたちは、機械のように理性的で居続けることができないのです。でも、「本能」を制御するある程度の力は備えています。たび重なる「外なる自然」からの災厄に、「理性」を失わない「内なる自然」を信じたいと思います。

(2020年2月24日)

シンキング・バース新書

ボクとワタシの日本語診断
「内なる自然」とヒト

2020年2月24日（初版）発行

著者：シンキング・バース
日本語研究班

発行者：遊佐 芳泰

発行所：**シンキング・バース**

〒021-0821

岩手県一関市三関字神田105番5号

電話／FAX 0191-23-0724

※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バースに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。